

対馬の海ごみから世界をみる

長崎県立対馬高等学校 2年 西山 海和

私の住む長崎県対馬市は山林が約九割を占める自然豊かな島です。周りを海に囲まれ、海産物が豊富なため漁業が盛んです。私にとって海とは、幼い頃から友達と遊んできた、親しみ深い場所です。

しかし、私の大好きな対馬の海は変わってしまいました。現在、対馬の海には外国からのプラスチックごみや国内の灌木、漁の仕掛けなどが漂着し、それは日に日に数を増しています。変貌した景色に、私の知る対馬の海は特別なものだったのだと気づかされました。

そんな私が海ごみに強い関心を持ったのは高校一年生の頃です。ESD 対馬学に参加し、対馬の海の現状を知り、少しでも綺麗だった海に戻ってほしいと思いました。

ESD 対馬学とは、地域の課題とSDGs を絡めた探求学習です。対馬市はSDGs 未来都市に選定され、様々な取り組みを行っており、その中にESD 対馬学等の教育支援の項目もあります。私の在籍する対馬高校も市役所と連携し、対馬の環境をより良いものにするための活動をしています。

また、商業経済部の活動の一環として商業研究発表会へ出場することになり、テーマを「対馬の海ごみ」に決めました。そこで株式会社対馬CAPPという地元企業に協力していただき、海ごみの事前調査を行いました。対馬CAPPとは、海岸清掃を行うことで、海岸漂着物から対馬の海岸と海を守り、将来世代に引き継ぐための活動を行う団体です。

調査地点である椎根浜へ行った時、目の前に広がっていたのは、地面を埋め尽くす無数の発泡スチロールとペットボトルでした。いくら拾っても海ごみは無くならず、予定時間が過ぎた頃にはごみの山ができていました。拾ったペットボトルは九百本以上、どこの国から流れてきたか調べるためにラベルやコードを手掛かりに分別しました。形が歪で読み取れないものも多くあり、分別の難しさを知りました。多くは韓国や中国などから流れ着いたもので、他国が近い対馬だからこそ海を介して様々な国のごみが流れつくことを実感しました。

この多くのプラスチックごみは、いまだのような問題を起しているのでしょうか。プラスチック粒子となり、海に生息する生き物に危害を加え、海洋環境の懸念材料となっています。これがマイクロプラスチックです。マイクロプラスチックとは五ミリメートル以下のプラスチックのことを指します。マイクロプラスチックの最も厄介な点はその大きさから回収が困難である点にあります。

現在、マイクロプラスチックが人体にどのような影響を与えているのか解明されていません。しかし、化学物質に汚染された魚を食べると間接的に私たちの体内にも化学物質が入ってしまうこととなります。マイクロプラスチックを減らすためには、海岸に流れ着いているごみを減らしていく必要があります。そのためにプラスチックの削減を徹底しないといけません。例えば、ペットボトルからマイボトルへ、レジ袋からマイバッグへ、などプラスチックの使用を減らしましょう。再生紙を利用してタンブラーを作る、自分たちがSNSを開設し情報を発信するなど、私たちができることから始め、海や海ごみに関心のない方でも楽しめる活動を行いたいです。対馬高校では過去に対馬CAPPと美術部がコラボレーションし、マイバッグを作成しました。高校生が発信することにより保護者が興味を持ち、保護者から第三者へ広めていくことが出来ます。

まずは身近な対馬から発信し、長崎、九州、日本全国へ、そして海外へ私たちの活動を波及させたいです。